

Title	都市の形態論から表象論へ : R.ルドゥリューを中心にして
Author(s)	小林, 多寿子
Citation	年報人間科学. 1983, 4, p. 177-191
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/4234">https://doi.org/10.18910/4234</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

大阪大学人間科学部 〔一九八三年二月〕

『年報人間科学』第四号 一七七頁—一九一頁

## 都市の形態論から表象論へ

—— R・ルドウリユーを中心にして ——

小林多寿子

## 都市の形態論からの表象論へ

— R・ルドウリュウを中心にして —

### 一、はじめに

今日のフランス都市社会学の動向を概観するとき、都市空間の社会学的研究における一つのアプローチの変化が認められる。それは従来の地域構造論や社会システムとして都市を分析する視角から、都市に居住するものがその都市に対して抱くイメージあるいは都市を構成する様々な要素がもつ意味をとりあげるというような都市の表象に注目する研究へと移り変わる動きとして捉えられる。このような動向を都市の形態論から表象論へという展開として把握する。そしてこの論文においては、具体的にレーモン・ルドウリュウ (Raymond Ledrut) の研究(1)のうちこの展開を跡づけることを試みたい。なぜならば、ルドウリュウの場合、その研究のなかにこの展開がはっきりと表出しているからであり、さらに、それぞれのアプローチは実証的な研究に基づいて論じられているからである。

そして、その特徴を明らかにするために、つぎの二つの点の考察を行なう。第一に、ルドウリュウのアプローチの変化を従来の都

市社会学における研究と対比させて、その特徴をより鮮明なものにする。ここにおいては、類似の動向の見い出されるアメリカ都市社会学、特に、初期シカゴ学派から W・ファイアレイ (Walter Firey) への系譜をとりあげる。すなわち、初期シカゴ派の都市研究が明白に都市空間の形態的な側面を対象としたものであり、その後の展開のなかで、ファイアレイの継承が都市の表象に着目したものであるとみなされている。おしなべて、人間生態学から始まり、コミュニティ論、権力構造研究など多様なアプローチを示してくれるアメリカ都市社会学の動向に対し、フランスの都市社会学者たちは多大な関心を払い、絶えず見守りかつ現に取り込みも行なっている(2)。しかしながら、たとえ共通の問題があっても、フランスの都市の状況(3)やフランス社会学の特質から決して同じ議論がなされるわけではない。そこで、シカゴ学派を都市社会学の原型とみなして、これとフランス都市社会学を対比させる試みは、その特質をより深く把握するための手がかりを与えてくれるだろう。

第二は、ルドウリュウが都市の表象を論ずるにあたって、その基礎にもっている空間概念を明らかにすることである。そして、それがフランス社会学の背景のなかで見い出される社会と空間の捉え方

とどう通じているのかという視点でも検討してみたい。つまり、フランス社会学における都市へのとりくみは、E・デュルケームの『社会分業論』のなかにその発端を見い出すことができる(24)が、これまでは、デュルケームの出した社会的分業、密度、アノミー等の概念がシカゴ学派へ影響を与えた(25)点のみ強調されて、フランス都市社会学でのこれらの概念の継承発展は必ずしも明確にされているとはいえない。しかし、今日の都市論を概観して気づくことは、これらの概念の都市社会への適用を明らかにすることよりもむしろ、デュルケームの持つ社会と空間の関係についての考え方が現在の都市研究に何らかの理論的な基礎を提供している点について検討しなければならぬことである。

以上のような考察を通じて存在する問いは、都市社会学のなかで未だ少数とはいえず決して無視することのできない都市の表象の側面への注目を、既存の研究との関連でどう捉えうるのか、またこのアプローチによって何が明らかにされるのか、したがって都市研究においてどの程度有効であるかを問うことである。

## 二、ルドウリュウの展開

R・ルドウリュウは、トゥールーズ大学の都市社会学者である。フランス南西部の地方都市トゥールーズを中心にして実証的研究を積み重ねる一方で、都市の理論的分析を積極的に行なっている。ルドウリュウの一九六〇年代後半以降の研究を検討してみると、

特に、初期の都市空間の分析の特徴としてつぎの三点を指摘しよう(26)。

第一は、都市の社会学的構造化を二重の過程として捉えていることである。つまり、一方で都市と農村の対立にみることもできるように、都市の地域社会がその周辺の農村に対して個別化され、他方で都市の地域社会が内部的に形成されるといふ二重過程である。そして、その都市空間の内部ではいわば個人を中心に同心円的に広がっていく(△家庭 (foyer) — 近隣 (voisinage) — 街区 (quartier) — 都市空間 (espace urbain) ) という分化の過程で描かれている。

第二には、特に農村と異なって都市空間であることの特徴として、近隣単位と街区の存在があげられている。近隣とは、住居を基礎としてその近接性のもとに相互に援助し合い交際の関係を維持する人々の集団であり、そこではインフォーマルな第一次集団の人間関係が結ばれる。このような従来通りの規定に対し、街区のほうは、地域性の基礎の上に都市社会のなかで社会的役割をもち、フランスにおいてはその集合が都市を形成しているところから、個人と都市の間に介在する都市空間の中間モデルとして位置づけられている(27)。

そして第三に、このように分化された都市空間の構成要素が様々な機能的な連関をもって統合したものとして都市を捉えている。特に、ルドウリュウは都市の様々な場を機能的な観点から研究するポイントを四つあげる。一、行使される機能の数、二、機能の特質(どのような場の利用の行為があるか)、三、機能の拡大(何人の

人に役立つか)、四、機能の利用の頻度。これらの点からの分析によって、たとえば単一あるいは複数の機能の場であるか、機能性は狭いか広いが、中心性の問題などについて論じている。要するに、都市の形態的側面からみてその機能性を検討し、都市を一つの社会システムとして捉えている(8)。

ここで都市空間の分析の最も重要な単位とみなされるのは街区である。ルドゥリューは「都市は街区の集塊である」と表現する。あるいは、その特徴をギュルヴィッチ(G. Gurvitch)を引用して「街区は『他人との関係』の広い全体と近隣の単位である『われわれ(Nous)』の多数を含める『一つの集団(groupement)』である」そして、集団として街区はこの「他人との関係」と「われわれ」を構造化すると述べる(9)。とりわけ、都市空間の中間モデルとしてみなされる街区はつぎのような特質が指摘されている(10)。

物理的空間としての街区は、五千人以下の住民にサービスをする施設からなる中心地区をもち、周囲は三回を超えない広さである。

それはすなわち街区が歩行者の世界ということである。また、街区とは社会的・行政的な実在である。生活様式が都市的になるにつれて多くのサービスが必要とされ、都市はそれらのサービスを保証しながら存在している。これらのサービスは居住の場へ分配されるが、多くは空間に位置づけられた施設に結びつけられる。たとえば、商店、学校、集会場、劇場などへの往来は、一つの街区を形づくるのに大きく貢献している。つまり、街区を構成する空間的な組織は様々なレベルで消費行動に密接につながっており、したがって

施設と消費は街区の存在条件とされる。

これらの点は街区が都市空間とそこに居住する個人の両方に対して持つ機能性の特質であるが、他方で、街区は歴史性という特質を備えている。西ヨーロッパ都市の古い街区は、数世紀前の教区(paroisse)に起源をもち、様々な施設、建物、広場のまわりに組織化された集合活動と結合の中心であった。さらに、革命期には社会・職業的基礎の上に街区の分化が続いた。近年は、都市の発展に応じて郊外にニュータウンの団地群や一戸建て住宅地域のような新しい街区がつくられる。

ところが今日、街区がもはや有効性をもたない段階あるいは街区の解体化の過程が現われていることが新たな問題となっている。つまり、街区とは施設の中心があるだけでは十分でなく、現実的集合的生活と帰属感情がこれらの施設の基礎の上に発展する必要がある。したがって、街区という都市空間の要素を、単にその機能性だけで論ずることができないことは明らかである。そのことは街区における居住者の具体的な生活を検討するときにも指摘される(11)。

たとえば、都市居住者の多くは他の街区についてほとんど知らず、彼らの日常生活は社会空間のある限られた範囲のなかで行なわれている。主婦にとって買物をしたり訪問することを自分の居住する街区のなかで行なうのと、同じ都市のなかでも他の地域で行なうのでは、心理的に大きな違いがある。現実の街区の存在ではなく、個人によって知覚され「体験された隔たり」(l'éloignement vécu)によってその存在が理解されており、このような点は実際の行為に

も影響を及ぼしている。そこで、ルドゥリューは、都市に居住する人々の行為や態度に注目したり都市の要素の果たしている役割を考察するところから一歩進んで、具体的に個人の抱く都市の表象の研究をすすめるに至っている。

その際、ルドゥリューは、表象として都市を捉える前提に「都市的経験 (l'expérience urbaine)」という基礎概念をおく。都市的経験とは「個人のなかで都市が体験された社会空間として構造化されたもの」であり、行為を通じて意識のなかに形成されるものである。そして、都市がいかに関係されているか、都市がいかなる意味をもっているかは、この都市的経験を通じて知ることができる。

たとえば、日常的な経験の場のなかで、商店は購買を意味し、モニュメントは美しさあるいは醜さを意味する。つまり、物質、かたち、動きからなる都市の要素は、何かを意味している、あるいは幾何学的ないしは物理的な特質は意味を与えるものであるとみなされている。そこで都市の要素が意味し意味される関係とは、都市的経験に固有の意味作用と呼ばれ<sup>(26)</sup>、この関係は文化的に決定されるような慣習的なものであり、また知覚のなかで捉えられるイメージのような具体的なものである。さらに、この都市的経験とは一つの方法として言語を通して把握されることが大きな特徴である。

以上のような前提に基づいて、ルドゥリューはいくつかの調査を行なっている。それは大きく分けてつぎの二種に分類できるだろう。一つは、主体的な行為を通して都市のシンボリックな特質がどうあらわれるのかについての分析であり、もう一つは、主体的な行

為とは直接関係しない、いわば純粋な都市の表象の分析である。

第一に、位置決定についての行為をみてみると、「自分の住む都市のなかで自分の今いる場所をどう知りますか」という口頭による質問を行ない、この結果を検討したルドゥリューは、回答者が自己の位置決定に関して都市空間を分化させて識別していることを明らかにしている。その都市空間の識別は四つの基準に分けることができ、それは、もっとも大きな役割を果たしている地理的基準、食しい街区か豊かな街区であるかという社会的基準、商業地区、工業地区などの機能的基準、古い街区か新しい街区かという歴史性の基準に分類されている。そして、これらの基準が複雑に結合されて識別が行なわれており、また、都市が異なるとそれぞれの基準の果たす役割は違ったものとなっていることを指摘している。このような分析から、ルドゥリューは、この都市空間の分化のシステムと都市のシンボリックな側面の間には密接な関係があり、都市の居住者は基本的な場に対する関係によって自分のいる場所を知る、そして特に、都市のモニュメントとシンボリックな場の存在が位置決定に重要な役割を果たすと述べている<sup>(27)</sup>。

第二に、住むという都市空間のなかでの居住選択の行為において、土地の価格という経済性や仕事の場との近接や移動の容易さなど機能性の重要視はあっても、都市のシンボリックな側面はかなり弱いといわれている<sup>(28)</sup>。

ルドゥリューが行なったもう一つの分析は、都市的経験についてもっとも特徴的な説明を与えるのは言語であるという認識に基づい

て、主体的な行為と直接関係してあらわれるのではないが、都市の様々な要素に対して表現された言葉を通して都市がいかにか読みとられているか、いかに理解されているかを調査し、分析したものである。

ここで、ルドゥリューの用いた調査の方法を簡単にまとめてみると、人口約五〇万人のトゥールーズに居住し、様々な社会的属性をもつ(5) 二一六人の人々を対象として実際に面接を行なう。デパートやカフェテラス、田地や古い通りなど様々な都市の要素を表わした十一枚のイメージ写真を見せ、「これは何ですか」「これからあなたは何を思い起こしますか」という口頭の質問を行ない、さらに各々の写真に対し自由な注釈を付け加えてもらう。ルドゥリューによれば、△パロール (parole) √と△イメージ (image) √という二つの刺激を使ったという。パロールとは言葉の質問による調査であり、イメージとは写真の質問による調査である。そして、これらの言葉のメッセージあるいは視覚的メッセージを用いて問うことで都市的経験の範囲を広げるのに役立つたという。

この調査の結果は、多様な角度からの分析を可能とするものであるが、その分析の方法は意味論的分析といわれる。すなわち、回答者によって表現された言葉を何らかの意味ある言葉とみなしてルドゥリュー独自の価値 (value) と特性 (Caractere) にカテゴリーわけし、逆にこれらを都市の要素に対比させて、回答者の社会的属性とも関連させて、都市がいかにか読みとられているかを検討するものである。そして、この結果から都市的経験の型を把握しようと提起

している。

具体的に分析の方法をみると、たとえば、広場は△四つ辻√△駐車場√など都市の実際的な形態や機能以外に△出会いの場√△人間関係が結ばれる場√などと表現できる。あるいは、デパートに対しては、△便利である√△人混み√△モダンである√などと言い表わされる。このような言葉は、便利さなら機能的価値、人間関係については社交性のあり方、モダンであるなら歴史性というように、なにかの意味作用にカテゴリーわけされる。特に、倫理的価値、生命力の価値、美的価値、機能的価値という四つの価値と、経済性、歴史性、都市計画性、自然など十四の特性というルドゥリュー独自のカテゴリーにわけられる(6)。

さらに、ルドゥリューは、これらの意味作用がどのような社会的属性をもつ人々によってもっとも敏感に感じとられ、強調されているかについて検討する。たとえば、倫理的価値についてもっとも敏感なのは事務職あるいは労働者階級に属し、中心部あるいは郊外に居住する男性である、などのように、性別、職業別、居住地別という社会的属性を軸に、回答者とそれぞれの意味作用の表出についての相関関係が追求されている(7)。

このような調査と分析を通してルドゥリューが述べている結論は、以下のようなことである(8)。すなわち、都市の居住者が自分の都市を純粹に客観的な言葉では語っていないところから、都市とは外在する純粹なものではなく、都市とは自分自身に関係した△経験の現実√としてよびおこされるものであり、つまり、都市とは体

験されるものであるということである。したがって都市は純粋な私たち、純粋な量として理解されず、都市は道具のような抽象的なV空間ではなく、立体やモニメントの集合でもなく、体験されるものとしての都市は、単に事実であるだけでなく価値でもある。そして、都市は、客観的な軸と主観的な軸をもつ経験の範囲のなかであらわれる個性化された入実存するものVとして捉えることができる。

要するに、ルドゥリューの研究のうちに、機能性の観点から捉えた都市の形態論から、△パロールVと△イマージュVを用いて都市居住者の抱くイメージや都市の要素のもつ意味をとりあげる都市の表象論へという展開が見い出される。

### 三、生態学との比較

そこで、以上のような分析を踏まえた上で、ルドゥリューの展開の意味を考えその特徴を跡づけるために、序章で述べたような二つの考察を行なう。まず初めに、この形態論から表象論へという展開の先駆とみなすことができ、ルドゥリュー自身も影響を受けている初期シカゴ学派からファイアレィへの系譜を検討してルドゥリューの展開との対比を行ない、そこで認められる共通点、相違点を明らかにしたい。

初期のシカゴ学派では、バージェスらが都市の地域構造論の仮説を出し、都市空間形成のプロセスを生態学の概念で説明した。そ

してそのプロセスを貫くものは「競争」原理と経済性であるとした<sup>(26)</sup>。ただし、詳細にみると、単なる指摘に留まっているとはいえず、すでに初期のパークが都市にもつ「感情」の側面に注目していることが気がつく<sup>(27)</sup>。ついで、一九四〇年代に入って、ファイアレィがボストンの土地利用を検討した結果、特に三つの地域の事例から、都市における地域居住あるいは土地利用の形態が経済的要因以外の要因でしか説明できないという事例の存在することを明らかにした<sup>(28)</sup>。

たとえば、ボストンの一地区であるビーコン・ヒルとは、上流階級の居住地であるが、もっと住宅条件のよい市内の他の地区よりもビーコン・ヒルに住むことをなぜ選んだかを説明するものは、家賃という経済性ではなく、地域に対して抱かれた美的(美しい場所)、歴史的(歴史がある)、家族に関する(祖先が住んでいた)という主な三つの感情と、それらの感情が集合化されたものからなる地域のもつシンボリックな特質である。あるいは、衰退しつつあるスラムで、イタリア系移民のゲットーであるノース・エンドに居住することを選択するものにとつて、ノース・エンドとはイタリア人の結束のシンボルである。だから、この選択はイタリア人移民の価値との同一化を表わしている。また、中心部の公園であるボストン・コモンがボストン全体の生態学的な土地利用を妨げている原因は、コモンに対して抱かれる歴史的な感情に求められる。この感情の結合がコモンを「聖なる対象」として象徴化し、その神聖さをつくりあげている。



これらの事例から、ファイアレイは、それまでの生態学になかった「感情 (sentiment)」と「シンボリズム (symbolism)」を、都市全体の生態学的土地利用と個人の居住選択の要因という二つの点で役割を果たす、新たな変数として提出することを結果としている。ここで注目すべき点は、とりわけ、このコモンの神聖さがコモンのもつ空間的屬性よりもむしろ、集合的感情に対するシンボルとして人々の精神における表象から由来すると付け加えているところである<sup>(8)</sup>。そこは、個人が都市空間に、その全体であれ部分にであれ、何らかの表象を抱いていることを具体的に明らかにしたところといえるだろう。

このような初期のアメリカ都市社会学における展開とすでに述べたルドゥリューの展開とを対比させることを試みてみると、分析のレベルでは共通点が認められるが、展開の背景が異なることから相違点が生じていることがわかる。

まず、共通点は、第一に、都市の表象論において言語を媒介にして分析が行なわれていること、第二に、都市の要素に対して抱かれた感情は「価値」におきかえられ、その要素のもつシンボリズムとして捉えられていることにある。これらはそれぞれのアプローチを通じて都市の表象を捉える場合に共通する基本的な方法でもある。

他方、相違点は、表象の側面に着目する契機に存在するといえるだろう。ファイアレイの場合は、初期シカゴ学派への批判的検討のなかで「生態学的変数の非経済的要因の発見」であり、表象とはあくまで地域構造の説明要因にしかすぎないものであった。ルドゥリ

ューの場合は、個々人の抱く表象そのものを問題とし、そのために都市的経験の解明に主題をおいている。その展開は都市を社会システムとして捉えきれない側面への注目から導かれたといえる。さらに都市と空間そのものの考察を行なっているところから、様々な学問的影響のほかに、ルドゥリューのもつ空間認識が展開の基礎となつていることは見逃せない点である。

#### 四、ルドゥリューの空間概念とフランス社会学

ついで、第二の考察として、前述の対比によって認められた相違点を説明する意図を含めて、ルドゥリューのもつ空間概念を検討してみる。

ルドゥリューによれば、空間はものでもかたちでもなく、われわれとの関係によって決定されるものであり、そのような関係の表現であるとみなしている。そして、「都市を考えるためには空間を考へる」ことが不可欠であり、都市において問題になっていることは、空間に対する個人あるいは集団との関係であるといえる<sup>(9)</sup>。

このような空間概念を支える社会と空間および都市と社会の関係については、まず、社会は空間のなかにあるのではなく、空間は社会システムの投影の場ではなく、様々な関係の表現であるとみなされている。そして、「都市はわれわれが触れ、われわれが見る限りで存在し、社会との関係が物質的なかたちをとり具体化される限りで社会との関係のネットワークのなかに記入される」というやや極言

した表現さえなされる<sup>(55)</sup>。それは、ルドウリューが調査を通して得た「都市は人間が知覚し経験するものである」、あるいは「都市は社会的体験である」という言葉<sup>(56)</sup>を考慮すれば、個人を軸におくとき、都市とは物質的な側面をもった社会的存在であると同時に、自らの経験に依拠して表象されるものであるということになる。

このようなルドウリューの空間認識をみるときに想起されるのは、デュルケームの考える社会と空間の関係である。レヴィ・ストロースは「空間に関して認めなければならない多様でありうる特質を記述した最初の人は、デュルケームとモースであった」<sup>(57)</sup>と評価している。デュルケームにおいては都市が問題になっているのではないが、そこでは確かに社会と空間についての基本的な考え方の基礎が認められるだろう。

「空間的表象は、本質的には経験の所与が関連するとき初めて成立する」<sup>(58)</sup>。この空間的表象と経験的所与の関連は、空間の諸部分が質的に不均等で、互いに置きかえられない場合、つまり、それぞれの諸部分が他とは異なった特性をもつ固有のものであるときに可能となる。

「空間それ自体には右も左も高いも低いも北も南もない。このような区別はすべて明白に異なった情的価値が各方位に与えられることに起因している」<sup>(59)</sup>したがって、空間に与えられた個々の特性とは、人々の経験に基づいて付与された価値を表わしている。あるいは、価値を与えられることにより、空間の諸部分に質的な不均等

や個別の特性が生じたのである。

「空間の分割は社会によって異なる」<sup>(60)</sup>。一つの社会のなかで人々は同様に空間を表象することから、空間に対して表現された価値に共通性があることになる。そして、価値が付与されることによってなされる空間の区分も等しく共通なものとなる。このことは逆に空間における様々な区分が社会的起源をもつことを示している。このような空間の分割とは、社会が異なればまた異なったものとなるのである。

さらに、社会の組織と空間が関連していることを問題にしている。社会を構成している個人と事物とが異なった諸集団に分配されている、あるいは分類されているが、「あらゆる衝突を避けるために」空間の一部分にそれぞれの集団が帰属されていなければならぬ、という<sup>(61)</sup>。逆に、社会に対応して空間が区別され、分化され、方向づけられていること、そういう社会的空間が社会の様々なカテゴリーの基底に存在していることを指摘している。要するに、デュルケームの場合、空間に言及するときに表象と経験の概念を用いており、社会と空間の関係が形成される一方で、個人と空間の関係が成立していることを暗に前提としていることになる。

デュルケームの空間論を評価したレヴィ・ストロースの場合には、社会と空間の相互関係の解明により重点をおいていることが特徴であろう。社会現象の空間における分布を問題とすると、必ずしも鏡のように反映しているのではないにしても、社会構造が空間のなかに投影されている点を指摘でき、社会が空間に対して無関心のみ

えるときでも、象徴的あるいは現実的なやり方で何らかの空間的表現がなされていると述べている<sup>(32)</sup>。具体的な事例研究としてのポロ族の村落構造分析は、村落の空間的形狀が「ありのままの社会構造を示すのではなく、住民の意識にあるモデルを表わしている」<sup>(33)</sup>ことを明らかにしたものである。都市を対象としたとき、簡単に「住民の意識にあるモデル」を汲みとれるほど単純なものではないが、その分析方法もあわせて社会と空間の関係を捉える重要な基礎となりうることに注目しておく必要がある。

しかし、ルドゥリューの論ずるところに立ち返って考えれば、表象論の前提に「都市的経験」を置いており、レヴィ・ストロースとは異なってそれぞれの都市居住者すなわち「個人」により重きをおいて、都市社会との関係、都市社会との関係の把握に努めていることになるといえる。したがって、アメリカ都市社会学との対比によって明らかにされた相違点を説明するためにルドゥリューの空間認識をみたとき、さらに辿るとデュルケムの空間論に行きつくことに気づく。そこで認められた空間論の二つの側面、すなわち社会と空間の関係および個人と空間の関係のうちで、主に前者を継承したのがレヴィ・ストロースであり、後者を受け継いだのがルドゥリューであるとみなしうるのである。

## 五、おわりに

以上、R・ルドゥリューの研究に沿いながら、今日のフランス都

市社会学の動向の一端を概観し、二つの考察を加えたのであるが、結びにあたって三つの点をさらに補足しておかなければならない。

第一に、形態論から表象論への展開とは、決して形態論が否定されて表象論へ移行したものではないことである。都市の形態的側面は、たとえば第三世界の都市へ研究領域が広がるなかでまず対象となる視角であり、特に、G・シヨバーク (Gideon Sjoberg) の都市の比較類型論に従えば<sup>(34)</sup>、今後も一つの基礎となるであろう。

第二に、表象論への注目は未だ一部の都市社会学者の動向であるが、都市の表象をとりあげることでも有効になる一面とは何かを考えてみなければならぬ。たとえば、外側から捉えうる形態が同じであってもそれぞれの都市で異なった意味が持たれているかもしれない、逆に全く異質に見える都市間に共通する価値がおかれているかもしれない。ゆえに、ルドゥリューの言葉を借りれば<sup>(35)</sup>、都市が我々との関係で存在する「個人的な次元の現実」をもつことを明らかにすることが一つのねらいであると思う。したがって、そこで得られたものから都市計画への応用も考えられるし、比較のための文化モデルを出すことも可能であるだろう<sup>(36)</sup>。

第三に、ルドゥリューの表象論がすべてではないことも述べておく必要がある。それはつまりルドゥリュー自身も他の方法を模索していることと、ルドゥリュー一人に限らずその他の人々の別のアプローチが存在していることをさしている<sup>(37)</sup>。ルドゥリューの場合、いくつかの限られた都市の要素を対象にして言語を通しての調査を行なったのであり、決してすべての表象を包括しているわけではな

いことは明らかである。様々なものに対して抱かれた表象が何を媒介にして表現されるか、そこに住まう者と都市の関係がいかにあり得るかという問題は、さらに展開の可能性も含めて今後の課題であり続けると思われる。

註

(1) R・ド・ドゥリユーの主な著作・論文に次のものがあり、以下略記する。

- 1963 : "Sociabilité d'habitat et structure urbaine" Cahiers internationaux de Sociologie, vol. XXXI.  
1966a : en collaboration avec Kayser (B.) "La mobilité de croissance d'une population urbaine; le cas de Saint-Gaudens" Tendances et volontés de la société française, S. E. D. E. I. S.  
1966b : en collaboration avec Roy (C.), "Toulouse; sociologie et planifications urbaines" Urbanisme, no. 93  
1968a : L'espace social de la ville, Anthropos.  
1968b : Sociologie urbaine, P. U. F.  
1968c : "Fonctions et pouvoirs dans les collectivités urbaines" D. I. S.  
1973 : Les images de la ville, Anthropos.  
1976 : L'espace en question—ou le monde urbaine, Anthropos.  
1981 : "Méthode ou méthodes?" C. I. S. vol. LXXI.
- (2) たとえば、シモンヌール・ユ・ロウツェ (Paul-Henri Chombart de Lauwe) はフランス都市社会学の創始者としての評価を受けているが、初期のペリの地域構造研究に基づいてシカゴ学派の多大な影響を受けていることが認められる。cf. Chombart de Lauwe, P.-H., Paris et l'agglomération parisienne, tom I—l'espace social dans

une grande cité—, tom I—méthodes de recherches pour l'étude d'une grande cité—, P. U. F. 1952. あるいは、今日の M・カステル (Manuel Castells) の中心シカゴ学派を代表とするアメリカ都市社会学を批判するものも、最初はまさに「その遺産を批判摂取」してきているのである。cf. Castells, M., La question urbaine, Maspero, 1975. 奥田道大「都市の再生と都市社会学」U・d・No. 10—5—1981—1—1—14頁。西村茂「M・カステル、F・ゴダール」独占都市・企業・国家」名古屋大学法政論集、一九七九、三七—三九四頁。

- (3) たとえば、今日のフランスにおける人口統計からみた都市化の特徴は、一、首都パリへの圧倒的な人口集中、二、全人口の七〇%以上が都市居住者である。ただし、人口二十人以上で都市 (la ville) あるいは都市的コミューン (la commune urbaine) と見なされており、日本に比べて都市の規模がはるかに小規模、などの点を指摘している。cf. Ledrut, 1976, pp. 17—28.
- (4) Durkheim, E., De la division du travail social, 1893. 田原音和訳「社会分業論」青木書店、一九七二、二五〇頁—二八二頁。
- (5) cf. Wirth, L., "Urbanism as a Way of Life," A. J. S., vol. XXXIV, 1938. 高橋勇次訳「生活様式としてのアーバンニズム」鈴木弘編「都市化の社会学」誠信書房、一九六五、一二七—一四七頁。
- (6) Ledrut, 1968b, pp. 107—140. Ledrut, 1968c.
- (7) Ledrut, 1968b, pp. 110—140. 彼は「ロマネーノによれば、街区は「日常生活を執行する場であり、都市を縮小したモデルである」が、社会関係の多様性が存在する「ミクロコスモスである」という。cf. Coornaert, M., "Ville et quartier," C. I. S. vol. XL, 1966.
- (8) この視点から実際の都市への応用研究に、このものがある。Roggenmans, M.-L., La ville est un système social, l'Institut de Sociologie de l'université de Bruxelles, 1971.
- (9) Ledrut, 1968b, p. 118.
- (10) Ibid., pp. 110—140.



(表2) 「イメージ写真と意味作用の連関」

イメージ写真	意味作用	意味作用の種類
1. カフェの内部 カフェのテラス	人間関係 階級ではない社会集団の特徴 自然的存在 例外的であり規則的な利用 階級の社会	社交性のあり方 集団の特徴 自然性 利用の時間 社会組織
2. デパート 市場の陳列 団地	便りさ 拘束 群衆 有用性 現代性	機能的価値 倫理的価値 社交性 利用性 歴史性
3. ぜいたくなブティック Alsace 通り Rivoli 通り	美しさ 広さ 整頓された ブルジョワ	美的価値 空間性 秩序 集団の特徴
4. 狭い古い通り 古風な通り	古い 不便 狭い 汚い 自然がない 保存すべきあるいは破壊すべき	歴史的価値 空間性 自然性 衛生性 都市計画的準拠

だ」というものがある。明らかに「暖かさ」と「息苦しさ」は「生命力」の二次元と同じ意味作用と価値に属せられる。息苦しさは生命力の破壊であり、逆に暖かさは生命力の源であり発展なのである。」  
Ledrutt, 1973, pp. 206—207.

(7) ルドゥットレーの分析は、特に、都市の要素とその意味作用の関係、意味作用と様々な社会的属性をもつ都市居住者の関係、これら三つの連関、そして意味作用そのものの分析という四つの次元に重点がおかれている。ここでは、その例として「社会的属性に從つた価値の特性

の強調と類型」(表1)と「イメージ写真と意味作用の連関」(表2)の二つの表を掲げておきた。

—Ledrut, 1973, p. 253, p. 308

(8) Ibid., pp. 58—59.

(9) McKenzie, R. D., "The Ecological approach to the study of the human community," A. J. S. vol. 30—2, 1924. Burgess, E. W., "The Growth of the City: An introduction to a Research Project." (The City), Univ. of Chicago Press, 1925. 奥田道大訳「都市の発展—調査計画序論」鈴木編『前掲書』一三—二六頁。Park, R. E. & Burgess, E. W., Introduction to the Science of Sociology, Univ. of Chicago Press, 1921. Wirth, op. cit.

(20) パークは、都市は単なる物質的な機構でもなければ人工的な構造物でもなく、「都市とは一種の心の状態であり、慣習や伝統やこれらの慣習の中に本来含まれ、この伝統とともに受け継がれている組織された態度や感情の集合体である」と捉え、都市のもつ心的あるいは道徳的な側面を明らかにしている。特に、「感情」と都市の地域の関係については、都市における感情的な側面を要因とする地域形成と感情の付帯による地域の変化と二つの点で言及されている。Park, R. E., "The City: Suggestions for the Investigation of Human Behavior in the Urban Environment," A. J. S., vol. 20, 1916. 笹森秀雄訳「都市—都市環境における人間行動研究のための若干の示唆」鈴木編『前掲書』五七—九六頁。

(21) 生態学的方法の系譜のなかで、ネオ・エコロジーといわれるホーリー(A. H. Hawley)が文化的要素を排除したのに対し、「文化生態学」と称されるファイアレイは、広範な「地域構造変動過程分析の側面を見失なっていた」が、文化的要因を考慮したことから、パラダイムの修正の発端となったと位置づける評価がある。本稿では、シカゴ学派を原型とするアメリカ都市社会学における一つの系譜として形態論から表象論への流れを捉えてみたが、元来、人間生態学とは人間の

- 空間的・時間的環境適応を考えるものであり、その都市への応用は、都市の形態と人間の関係の論議なのである。表象論として把握するフレイも、あくまでその生態学の範疇のなかで都市を論じていることを自らも述べていることが考慮されなければならない。(ただし、「文化生態学」の形容矛盾が指摘されてゐる) Firey, W., "Sentiment and symbolism as ecological variables." *American Sociological Review*, vol. X, 1945. Hawley, A. H., *Urban society: An ecological approach*, The Ronald Press, 1971. 矢崎武夫監訳『都市社会の人間生態学』時潮社、一九八〇。Bernard, J., *The Sociology of Community*, Scott, Foresman and Company, 1973. 正岡寛司監訳『コミュニティ論批判』早稲田大学出版部、一九七三。高橋勇悦『現代都市の社会学』誠信書房、一九六九。鈴木広『比較都市類型論—発想の系譜を中心に』倉沢進編『社会学講座5 都市社会学』東京大学出版会、一九七三、二三頁。
- (22) Firey, op. cit., pp. 140—148.
- (23) Ledrut, 1976, pp. 11—13.
- (24) Ibid., p. 231.
- (25) Ibid., pp. 231—232.
- (26) Lévi-Strauss, C., *Anthropologie structurale*, Librairie Plon, 1958. 荒川・生松・川田・佐々木・田島訳『構造人類学』みすず書房、一九七二、三二六頁。
- (27) Durkheim, E., *Les formes élémentaires de la vie religieuse*, 1912. 古野清人訳『宗教生活の原初形態』岩波書店、上、一九四一、三三頁。
- (28) Ibid., 三三頁。
- (29) Ibid., 三四頁。
- (30) デュルケーム、前掲書、下一九四二、三六九頁。
- (31) レヴィ・ストロース、前掲書、三一八—三二〇頁。
- (32) Ibid., 三二〇頁。
- (33) ショバークは、パージェスの同心円理論が普遍的なものではないことを前産業的ないし非産業的都市の社会的・生態学的構造の分析によって明らかにし、「かつて普遍的に通用するとみられた命題で、今日、特定の文化のものでしか妥当しないことが判明した」と指摘する。ということは、シカゴ学派の形態論は決して普遍的なパラダイムではないわけであるから、文化の異なる都市研究では、まず、都市の形態が分析の対象とされなければならないことになる。したがって、今後必要となるのは、文化的要因を考慮した都市の形態の類型とそれらの説明図式であろう。Stoberg, G., *The Pre-industrial City*, The Free Press, 1960. 倉沢進訳『前産業型都市』鹿島出版会、一九六八。
- (34) ルドゥリューはつぎのように述べている。「都市のイメージについてトワールルーズとポーでなされた最近の調査は、資本主義と商業主義の統治によって引き起こされた歪み、断絶、疎外にもかかわらず、都市は居住者にとって利便性あるいは外形的な機能としてではなく、感情的で、生命力のある、そして個人的な次元の現実として現われることを示した。われわれの大多数にとってわれわれの住む都市は具体的な社会的存在であり、さらには個人にとっては喜びあるいは不満を伴ってあらわれるものである。」あるいは「都市はより豊かで、より個性化され、より生々した存在である。」Ledrut, 1976, p. 238.
- (35) cf. Bel, J., "Les catégories sémantiques du discours urbain au Japon et en France," *C. I. S. vol. LX*, 1976. モンネ・セル「日本都市社会と空間」『現代社会学』第十号、講談社、一九七八。
- (36) ルドゥリューは、H・ルフエールの都市空間論、R・バルトの都市の記号論へのとりくみ、K・リンチの都市の知覚形態に関する研究など他分野での動向から影響を受けていることも無視できないであろう。